

研究発表

文学研究の中核概念としての「文学」および「作品」

“Literature” and “Work”

as the Central Concepts of Study of Literature

坂野信彦*

Abstract

In these days, a study of literature is in a state of an extreme diversification. At the same time, it is in a state of confusion more than it was. The fundamental cause of this confusion seems to be in the vagueness of the concepts on the two basic key words of the study - “Literature” and “Work”.

“Work” is something having been made. It should be regarded as an object which independently exists from an author or a reader. It cannot be easily influenced by any change in a society nor by any character of a reader. Then, it is necessary to place “Work” in the dimension of a linguistic symbol’s formal side -- a signifier.

On the other hand, “Literature” should be regarded as one which always contains a mental content and value. It must be subjectively created by each reader through an interaction with the work.

As a result of these two concepts, I, hereby, propose

※ Sakano, Nobuhiko [現職] 中京大学助教授

to clarify the definition of "Work" and "literature" as follows: a chain of a signifier and a subjective recognition of a reader respectively. If we establish these new concepts, it will become possible to have a common basis among the diversified studies of literature.

はじめに

本稿に述べることは、文学研究に関するひとつの一般的な提案というべきものである。現状の改革へむけての提案であるが、かならずしも理論的な厳密さを貫いてはいないし、現状認識にひとりよがりな点があるかもしれない。けれども、学問の国際化、学際化が文学研究の分野にまでおよんできている現在、こういうかたちで文学研究という学問の自己反省をおこなってみることも無意味であるまい。あえて以下の提案を試みるしだいである。

I

文学の研究は、こんにち、大いに盛況の觀を呈している。研究の対象は拡大し、研究の方法は多様化してきている。文学の学問にとって、これは一見よろこぶべきことのようにみえる。しかし、よく観察してみると、じつはこれはとてもよろこんでばかりはいられない状況であると思われる。文学研究は、その外見上の盛況さに比例して、混乱の度をふかめてきているのではないだろうか。研究は多様化したけれども、そのぶんだけ混乱も大きくなってきていると思われるのである。

日本文学の研究にかぎってみても、研究者の人数と論文の数はすこぶる増加してきたけれども、それにみあうだけの学問的成果があがっているようには、かならずしも思われない。個々の研究者がめいめい勝手に何かやっているといたった様子で、本質的な問題について研究者相互の研究がまともにかかわりあうことが少ないようにみうけられる。外国人による日本文学の研究もとみに盛んになってきているが、日本人による研究と外国人による研究とが相互にかかわりあうことは、なおのこと困難であろうと危惧される。要するに現状のままでは、それぞれに主体性をもった研究者による、共通の基盤にたつての研究の積み重ねということが、かなり困難であるということなのである。とするならば、このままでは学問の健全で着実な発展は望むべくもないということになる。また、近年は現代文学までもが研究の対象に加えられ

ているが、近代文学や現代文学の研究においては、「観賞」や「批評」と「研究」との境界さえあいまいなままになっている。大学の卒業論文には、読書感想文と区別のつかないようなものが多数提出され、良い点数がつけられている。それもそのはずで、文学担当の多くの教師は、研究者じしんの主観が多分に介入するところに文学研究の特色があるというふうと考えているようなのである。これでは文学研究は、一科の学問として成り立つために必要とされる客観性や公共性を、研究にさきだってみずから放棄してしまっているも同然である。文献学的な訓話注釈が主流をなしていたころにくらべると、現在では学問の規準がよほどあいまいになってしまっている、といわねばならない。

文学研究がこのように混乱してしまっている原因はさまざまあろうが、根本的には、研究の対象がどのような性質のものであるかという認識が、研究者によってまちまちであるということ、これが最大の原因となっているように思われる。研究対象のありかたについての私たちの認識は、研究対象をさし示すことばの意味内容によって左右されると考えられる。文学研究の対象を示すことばとしては、当然ながらまず「文学」(Literature)ということばがあげられる。そしてそれに劣らず重要なことばとして「作品」(Work)ということばがあげられる。文学研究が何らかの意味でつねに作品とかかわるものであることはいうまでもない。「文学」と「作品」、このふたつの中核的なことばの概念内容が、文学研究の対象についての認識を大きく左右するものと考えられる。

文学研究者によるこのふたつのことばの使われかたを調べてみると、はなはだしくあいまいで不統一な意味づけがなされていることがわかる。「文学」と「作品」というふたつのことばは、ほとんど区別されずに用いられる場合と、異なる対象を示すように用いられる場合とがある。区別されずに用いられる場合、たとえば「川端康成の文学」と「川端康成の作品」とがほとんど同じ意味になる。同じものを意味するのにふたつの異なったことばが用いら

れるということはまぎらわしいことである。しかしそれよりもさらにやっかいなことは、同じものを示すように用いられていても、示される対象そのものについての概念が、研究者によって微妙にズレているということである。

「文学」もしくは「作品」を、ある人は文や文章など言語的次元の存在とみなしており、ある人はイメージやテーマや価値などを含むものとみなしている、といった状態である。

いっぽう、「文学」と「作品」というふたつのことばが異なる対象を示すように用いられる場合には、たとえば「この作品は文学でない」などと言う。このような場合、「文学」と「作品」とがかならずしも同じものでないということはわかるが、それぞれのことばが正確に何を意味するのかは、あまり明確でない。そしてここでも、それぞれのことばの概念内容が、やはり研究者によって微妙にズレていることが指摘できる。

研究の対象をさし示す「文学」および「作品」の概念内容が、このようにあいまいで不統一であるかぎり、何人かの研究者が同一の対象を研究するということがすでに困難なことになってしまう。このような状態のままでは、文学研究は、公の場での研究の積み重ねもできず、いたずらに混乱の度を深めてゆくほかはないと思われる。

文学研究を混乱から救いだすために今もっとも必要なことは、「文学」と「作品」のふたつのことばについて、学術用語としての明確な概念を確立することではないか、と考えるのである。では、このふたつのことばは、いったいどのように概念規定したらよいのであろうか。以下、それについてのひとつの試案を、筆者なりに提出してみることにしたい。

II

文学とよばれる現象を客観的に観察してみると、それはつねに人間の言語活動とともにあるということがただちに認識される。そしてその活動は、性質をまったく異にするふたつのものによって成り立っていることが容易に認

識される。ひとつは、個人の意識から独立して存在するもの、もうひとつは個人の意識においてのみ現出するもの、である。前者はどの享受者にも共通に与えられる対象であり、後者は個々の享受者が各自の性格に応じてみずから形成するものである。(注1) この両者は混同すべからざるものであり、研究の場における両者の混同が文学研究を混乱へ導くことは明白である。そこでわれわれは、この両者を別個にさし示す用語を使いわけることになければならない。前者には「作品」、後者には「文学」ということばをあてるのがもっとも適当であろう。(注2)

「作品」ということばは、辞書的な定義においても、作られたもの、作者による制作活動の結果としての制作物、を意味する。(注3) 制作物の存在は、当然ながら作者からはすでに独立しているし、享受者からも独立している。つまり「作品」は、人間による働きかけをまったく必要とせずに、それじしんで充足して存在する客体なのである。それゆえに「作品」は、時代や社会や個人を超越して、変化することなく存続しつづけることができるわけである。では、そのような客体的存在としての「作品」は、具体的にどう概念規定したらよいであろうか。

「作品」とよぶものにはさまざまな次元のものが考えられるが、社会の推移や享受者の個性によって変化しないといった条件を満たすもの、ということになると、それは言語上の次元に限定されてくる。ただし言語も変化するから、言語上のいかなる段階が適当であるかが問題となる。ことばの意味が変化するという事実を考慮するならば、言語記号の形式的側面、言語学という記号表現、能記 (Signifier) の次元にまでレベルをひきさげなければならないと思われる。この次元では「作品」は、音韻や文字の羅列にすぎないものであって、何の意味ももちえないが、これ以上の段階になると享受者によって受けとりかた (解釈のしかた) が異なってくるから、作品に同一性がなくなってしまう。作品に同一性がなくなれば、文学研究はどうぜん混乱してしまう。もっとも、ジャンルによって混乱の度合いに大きな差が生じて

くる。いうまでもないことであるが、一字一句の意義のとりかたの相違は、短歌や俳句においては文学上の決定的な影響があるが、物語や小説においては影響ははるかに小さくてすむ。さまざまなジャンルのさまざまな時代の作品を一律に扱うことはかなりの無理がともなうわけで、そのあたりの問題については筆者じしんいまだ十分にわりきれないでいる。ただ、学問の混乱をふせぐためには、あるていどの無理もやむをえないのではないかと思われる。

かたや「文学」のほうはどうであろう。文学研究の対象となるような狭義の意味において用いられる場合、「文学」はつねに何らかの精神的な価値をもつものとみなされている。意味があり、イメージがあり、リズムがあり、ドラマがあり、テーマがあり、情緒があり、感動がある。そのような精神的な実質の総体を、一般に「文学」とよんでいる。そうした精神的な実質は、個人個人のあたまのなかでのみ展開される。それらは、客体的存在としての「作品」じたいに所属しえないものであるから、「作品」を享受する主体が「作品」との相互作用を通じて、みずから形成しなければならない。享受者が主体的に形成するものはすべて、当然ながら、時代的特性や享受者じしんの個性によって規定される。事実、たとえば『百人一首』の一首一首の歌は享受者しだいで何とおりもの解釈がなされてきたし、光源氏やハムレットの人物像は享受者ひとりひとりの性格に応じてさまざまに想像されてきたのである。「作品」はひとつでも、「文学」の内容は享受者によって無限に多様であるわけである。こうしてみると、「文学」なるものは、特定の享受者による主体的な認識活動の所産としてとらえるべきもの、ということになりそうである。

Ⅲ

以上の理由によって、筆者は「作品」を〈記号形式の連鎖〉と規定し、「文学」を〈享受者の主体的な認識〉と規定することを提案したい。

このような概念規定によって、多様化した文学研究に共通の基盤をあたえることが可能になると思われる。また個々の文学研究が何をどう研究しているのか、という基本的な点もはっきりしてくると思われる。これによって、研究の対象や方法を根本から転換しなければならないような研究分野がたくさんあることも、あきらかになってくるはずである。

たとえば、とくに近代日本文学を対象として、「作品論」と称する研究分野がある。これは作品の解釈・鑑賞を軸として作品の「文学的世界」を論じるというものである。これなどは「作品」と「文学」とをごちゃまぜにしてしまっており、ほんらい相対的であるはずの「文学」を研究者の独善によって絶対化してしまうものといわねばならない。「文学的世界」なるものは作品にたいする解釈・鑑賞を通じてしかあらわれてこないが、解釈・鑑賞のしかたは享受者の数だけあるから、「文学的世界」は個々の享受者に特有のものと考えなければならない。したがってそれは、「作品論」というかたちで客観的に確定できるようなものではないわけである。どれだけたくさんの「作品論」が書かれようとも、一般性をもった学問的知識はいっこうに蓄積されることがないのである。

またたとえば、文学研究の集大成ともいうべき、「文学史」と称する研究分野がある。従来の文学史は、個々の作品をそれぞれが制作された時代環境に即して把握してゆくものであるか、でなければ制作年代順にならぶ作品群を現代的視点からとらえ評価してゆくものであった。それらはどちらも、文学という現象が享受者によって支えられ享受者しだいで変化してきたものであることを、ほとんど無視している。いいかえれば、「文学」と「作品」とを混同してしまっているのである。「作品」と「文学」とは別のものと考えなければならない。いうまでもなく『日本書紀』は歴史書であり、神楽歌は祭儀用の歌詞であり、『歎異抄』は宗教書であって、文学とは無縁のものであった。作品だけが時代を超え、やがて後世の享受者によって文学的な性質と価値を付与されることになるわけである。「文学」と「作品」の概念を明

確に規定することによってはじめて、文学という現象に十全な歴史的照明をあてることが可能になってくるのではなからうか。

このような概念の規定はまた、文学理論の分野においても重要な役目をはたすように思われる。従来の文学理論は、「文学」および「作品」という、もっとも基本的な用語についての概念規定を怠っていたために、理論としての明晰さに欠け、多くの混乱と矛盾をはらんだものとなっていた。「作品」というひとつのことばが、何のことわりもなしに、いつのまにか異なる次元のものを意味していたりするのである。`文学の永遠性、という問題がマルクス主義の文学理論家を苦しめたのも、彼らが「作品」というものについての明確な概念規定を怠っていたからだと考えられる。(注4) `永遠性、をもつのは「作品」であって「文学」そのものではないのである。このことを認識しさえすれば、彼らは「文学」を難なく「上部構造」に組み入れることができたはずなのである。

*

「作品」が〈記号形式の連鎖〉にすぎないということになると、解釈とかイメージの分析とか主題の追究とか価値判断といった認識行為は、いずれも「作品」を素材とする一種の創造活動というべきものとなる。しかもそれは言語習慣や知識や生活体験や興味・関心や感受性や価値観などの個性的な要素によって左右される創造活動なのである。このような創造活動が学問研究の名に値しないことは自明であろう。

しばしば文学研究に組み入れられている解釈や観賞や評価は、いずれも「文学」を生成せしめるための創造活動であって、それはせいぜい研究の対象となるべきものを研究者みずから創造してみるだけのことにすぎないのである。(注5) ひとつとによる「作品」の解釈や観賞や評価こそが、ほかならぬ「文学」の本質的な内容なのであり、したがってまた文学研究のもっとも重要な対象となるはずのものなのである。文学研究者は、自己流の「文学」を勝手に創造する人ではなく、「文学」という社会的な現象を客観

的に観察する人でなくてはならないだろう。

おわりに

筆者の提案するような「文学」および「作品」の概念規定には異論があるうし、ほかにもっと適切な規定のしかたもあるだろう。また、時代や社会のちがいやジャンルの別を捨象してしまうことには予想以上に大きな困難があるかもしれない。「文学」および「作品」の一義的な概念が公共概念として一般化されることは、あるいは不可能かもしれないし、たとえ可能だとしても、それが実現されるまでにはきわめて長い年月を要するであろう。だとすれば、当面われわれにできることは、研究者ひとりひとりが、「文学」および「作品」ということばをいかなるレベルのいかなる性質のものについて用いるかを、つねに明確に自覚し明記するということであろう。いずれにせよ文学研究上の中枢概念となる「文学」および「作品」を明確に規定することなくして、文学研究をこんにちの混乱状態から救いだすことは不可能であろうと思われるのである。

注(1) I・A・リチャーズは『文芸批評の原理』（1924年）のなかで、こう述べている。「批評家の洞察をほんとうに生かすためには、まずその前にしておかねばならぬことがある。つまり、その特徴をも含めて考えた事物と、事物に接した結果としての経験とを、はっきり区別することである。この二つを混同してしまったために、いろいろと議論を重ねたすえ、批評作品は不幸にもいま見るような膨大な量になってしまったのである。」（岩崎宗治訳）

注(2) 風巻景次郎は「文学史の問題」（1947年）のなかで、こう述べている。「文学は主体的体験であって、作品とは文学の存在の社会に投影された客観的証跡に外ならぬから、作品という存在自体は文学ではあり得ない。それをみずから読む者、またはその朗読ないし語られるのを聞く者にとってすなわちその作品を消費する者にとって一定の反応

が感じられたときに、はじめて文学であったり文学でなかったりが決められる。」

注(3) たとえば『広辞苑』には、「①製作した品。製作物。②芸術創作活動の成果。文学・芸術上の制作物。」とある。

注(4) たとえばルカーチは、「偉大なる芸術作品はその時代の土台を、その時代の生産諸関係や原則的社会諸関係を典型的に反映する。そこにこれら作品が存続する内容的基礎がある」（西田越郎訳「上部構造としての文学と芸術」、1951年）などと述べているが、いかにも苦しい説明である。`典型的、なものに永遠性を認めるところなど、矛盾はあきらかである。これにくらべると、高橋義孝による次のような反論の方が、むしろはるかに明快である。「『土台』は文学を生み出す。この意味では文学は『上部構造』である。が、文学は『土台』とその運命とともにせず、従って『上部構造』ではない。」（「マルクス主義文学理論批判——文学は上部構造か」1955年）

注(5) むろんここでは、研究者がみずから主体性をもっておこなう解釈や鑑賞について言っているのであって、作者の制作意図の究明をめざす`追体験、としての解釈や鑑賞はふくまれない。制作意図の究明は、「文学」という現象の解明に不可欠の研究分野である。

討議要旨

芥川隆信氏（武蔵野予備校）より、`作品、と`文学、を截断して類別する方法について疑問が出され、発表者より、`作品、が享受者の解釈如何にかかわらず存続することは、`作品、の超越性をものがたっている、`作品、享受の場合、歴史的モメントが介入するから、`作品と`文学、とを概念的にわけることは矛盾しない旨の返答があった。

最後に司会の長谷川泉氏（学習院大学）より、混乱する文学用語を整理す

る方法は、様々に検討していかねばならない、本発表には読者の契機をいれるべきである、重要な提言として受けとめる旨の発言があった。